# 小学生、中学生、高校生は古典に親しもう

―古典は人生の宝物、人類の宝物―

開倫塾
塾長 林　明夫

**Q：古典とは何ですか。**

A：(林明夫：以下省略)

(1)昔、書かれた書物。昔、書かれ、今も読み継がれる書物。

(2)転じて、いつの世にも読まれるべき、価値・評価の高い書物。

(3)古代ギリシア・ローマの代表的著述。

＊以上が、国語辞典として評価の高い「広辞苑」(岩波書店)による「古典」の説明です。

**Q：例えば、「論語」は古典ですか。**

A：「論語」は、「東北アジアにおける最高の古典である」といわれています。古典は、人々に智慧(ちえ)を与え、生きる力の源(みなもと)になっています。古典にはいつの時代にも、また、だれにとっても共通のことばが豊富に残されています。すなわち、「古典」は常に現代と交響しているのです。「論語」はその代表的な作品、「古典」の中の「古典」と私は考えます。

**Q：「論語」とはどんな本ですか。**

A：今から 2564 年前の紀元前 552 年に中国の魯(ろ)国の昌平郷に生まれ、紀元前 479 年に 74 歳で没したといわれる「孔子」の教えを、孔子の没後に弟子たちがまとめた 499 章の書物です。中国だけでなく世界中で読み継がれています。

日本にも早くから伝えられ、聖徳太子をはじめ多くのリーダーが読みすすめました。特に、徳川家康は国をまとめるにはリーダーの人格を磨くことが大切であるとの考えのもとに、「論語」の学習を奨励。江戸時代は、武士だけでなく庶民も「論語」に親しみました。

幕末の武士の学校である「藩校」、庶民が学んだ「寺子屋」でも「論語」はさかんに学ばれ、日本人の誠実さ、勤勉さの基礎を築いたと考えられます。

北関東でも大活躍をした二宮尊徳先生や、埼玉県の深谷で育ち、明治時代に多くの産業を興した渋沢栄一先生も「論語」に親しみ、リーダーとしての基本を身に付けました。

**Q：「論語」には、どのようなことが書いてあるのですか。**

A：(1)孔子は 52 歳のときに中国の魯という国の中都の司法長官となり、さらに 55 歳で魯国の公安・警察担当の長官となり、魯国の君主であった定公の右腕になりました。しかし、職を失い、69 歳までの 15 年間近くは自分の能力を評価して役割を与えてくれる君主を求めて諸国を放浪、苦難の旅を続けました。69 歳で生地である魯に帰国し、弟子の学問・教育に専念。74 歳

で他界なさいました。

(2)警察長官という要職を務めるほどの才能がありながら、このような苦難の人生を多くの弟子たちとともに過ごして感じたこと・考えたことを弟子たちに伝え、それを弟子たちが文章にまとめて竹の管に書き記し、後世に遺したものが「論語」です。

(3)このような背景を踏まえて「論語」を読むと、とてもわかりやすく、身に染みてきます。

**Q：例えば、どのような文章ですか。**

A：「論語」の第1章を御紹介します。

(1)子曰わく、学びて時に之れを習う、亦た説ばしからずや。

(訳)老先生は、晩年に心境をこう表された。

(たとい不遇なときであっても)学ぶことを続け、(いつでもそれが活用できるように)常に復習する。そのようにして自分の身についているのは、なんと愉快でないか。

(2)朋有り遠方より来る、亦た楽しからずや。

(訳)突然、友人が遠いところから(私を忘れないで)訪ねてきてくれる。懐しくて心が温かになるではないか。

(3)人知らずして慍らず、亦た君子ならずや。

(訳)世間に私の能力を見る目がないとしても、耐えて怒らない。それが教養人というものだ。

＊どうです。身に染みるでしょう。「論語」には、このような「教え」が 499 章にわたって書き記されています。「論語」の中心は「仁(じん)」、人間愛という考えです。「仁」つまり人間愛を深めて「君子」、つまり教養ある立派な人になるにはどうしたらよいかを自分の経験を通して弟子たちに語り、それを弟子たちがまとめたのが「論語」です。

**Q：小学生、中学生、高校生がそのような文章を読んでわかりますか。**

A：(1)江戸時代の藩校や寺子屋では、「素読」といって、意味がわかってもわからなくてもひたすら声を出して読み続ける学習の仕方、意味は何十回、何百回、何千回も素読しているうちに自ずとわかるという学習の仕方が一般的でした。

(2)現代は、わかりやすい「論語」のテキストが何十種類も出版されていますので、自分に合ったテキストを1冊身近に置いて、自分の「実力」に応じた読み方をすればよいと私は考えます。

(3)例えば、漢字だけの文章を「白文(はくぶん)」といいますが、「論語」を「白文」で読む能力のある方は、江戸時代のように「白文」をゆっくりと「素読」するとよいと思います。

(4)「返り点」などがある「論語」を読む能力のある方は、「返り点」つきの「論語」の「素読」をするとよいと思います。

(5)「書き下し文」を読む能力のある方は、「書き下し文」で「論語」の素読をしましょう。このように、自分の能力に応じた「素読」をお勧めします。

(6)いずれの場合も、「論語」の各章の「現代語訳」や「語句」の説明、テキストの編集者の「解説」もどんどん読む。はじめのうちは、「現代語訳」や「語句」の説明、その章の「解説」を何回か読んでから「論語」の本文の「素読」をすることをお勧めします。

(7)とにかく、第1章から第499章までを1～2か月間かけて読み切ることです。

(8)1～2回読んでこれは面白いと思ったら、気に入った章だけでも読み返すとますます面白くなるのが「論語」です。

（9）小学生は小学生なりに、中学生は中学生なりに、高校生は高校生なりに「論語」に親しみ、それから高校を卒業し、大学に進学し、社会人となることをお勧めします。

**Q：最後に一言どうぞ。**

A：（1）「論語」が本当によく「理解」できるのは、また、役に立つのは 70 歳を過ぎてからではないかと私は確信します。孔子は 55 歳から 69 歳までの約 15 年間本当に苦労し、そこで感じたこと・思ったこと、人間としてあるべき姿を語ったのが「論語」の内容だからです。70 歳になってから「論語」を読むよりは、小学生、中学生、高校生のうちから少しでも「論語」に親しんで、70 歳以降の人生に備えるというのも超高齢化社会の生き方かもしれませんね。

（2）今回は「論語」を例にとり、「古典」の学び方を考えました。日本国内にも、また、中国だけでなく世界各地にも「古典」は存在します。図書館や書店に行くと、様々な古典に出会うことができます。学校の各科の教科書に紹介されている「古典」を中心に、まずは 1 ～ 2 冊をじっくりと読んでみて下さい。

お気に入りの「古典」が何冊かあるだけで、皆様の人生が豊かになります。古典は人生の宝物、人類の宝物だと私は考えます。そのきっかけを小学生、中学生、高校生のうちにつかんで下さいね。

＊本文中の「孔子」や「論語」の説明、その現代語訳については加地伸行・全訳注「論語」増補版、講談社学術文庫、講談社 2011 年 3 月 8 日発行を参考にさせていただきました。

― 2012 年 11 月 11 日記―